

だって全てをゼロから作っただ。明日どうしよう

だもん

語り手 井上眞一(中学一期生学年主任)、聞き手 山登葉桜

*

学校と一緒に成長してきたこれまで

—どのようにして学校を立ち上げたんですか？

京都の平安女学院あるでしょ。あそこね、大学がここにあったんだよ。だから、この建物(メディアセンター)、この図書館の建物は平女の建物をそのまま利用してるんだ。大学だったんだけど、事情があつて四年ほどで廃校になった。うん、だから、その跡地と校舎をそのまま生かして今の学校ができあがった。

一方で、守山女子高校(以下、守女)は、老朽化していてね、廃校にしようかという話にもなっていたらしい。

その守女に立命館が入って、最初、守女の校舎を一年間借りて、その間に平女の跡地を整備して、新校舎を作るという準備をしたよね。だから、最初の一年間は、駅から歩いて十分ぐらいの勝部町に元守女の校舎があつて、一期生の人たちはそこを借りていた。そこで一年間授業を受けて、そのあと、二年目から、今の校舎に入った。全国で初めて公立学校が私立の学校に変わることになったんだ。

新一年生だけが男女共学一期生で、二年生、三年生は、もともと守山女子の生徒が立命館の生徒になったということ。

—学校を立ち上げることはやはり、とてもむずかしかったですか？

いや、面白かった。やっぱ学校を作るっていうのはね、長いこと学校の先生やってても、そんな滅多にないことですよ。みんながみんな経験できるもんじゃない。もうごく限られた人ですよ。ゼロから学校作るなんて。で、それをたまたま立命館という学園が作るということだね、そこに乗っからせてもらえたっていうのは幸せなこと。でも、大変なこととは大変でしたよ。なかなか帰れないし、完全にもう、今言われてる、学校のブラックを背負ってやってみたい、そういうところあるけれども(笑)、それは、あまり苦にはならなかったかな。ほんとに、十二時過ぎてから帰るような日があつてもね。

でも、それは、今やることが何か次に繋がっていくっていうのが見えるから、普通の働き方からいったらとんでもないことだし、改善はしなきゃいけないことなんだけど、その時はみんな頑張るしかないねっていう、そういう結束力で、先生たちもね、立ち向かっていったんで、学校自体はすごく活気があつて面白かった。

—なぜこの仕事を続けるんですか？

どんなに苦労があつても、卒業式で成長した生徒の涙を見たら、ぜんぶふっ飛んじゃうんです。やってよかったって。高校一期生の卒業式なんか、三年まで担任を持てなかったのが悔しかったこともあつて、吉田先生と一緒に会場でわんわん泣いた。

今は、定年を過ぎてしまつて、仕事を持ってた方が張り合いがあるんでね。

—先生が思う立守の魅力ってなんですか？

うん。今、どんないろいろな意味で魅力的になってきていると思うけど。最初はその魅力を創るのにもすごく苦労しました。いくら立命館の附属校だからといって、滋賀県には私立学校の文化が少なくつ

て。京都だったらね、色々あるじゃない、それこそ附属があればね、私立高校もたくさんあるし。だから、選択肢の中に私立高校っていうのはあるんだけど、滋賀県では基本、県立の学校に行くっていうのが当たり前で。私立は滑り止めっていうのも当たり前。だから、第一志望で私立を選ぶっていう人の割合が少ないのが滋賀県だったんで、そこに来たら立命館の冠があっても気を付けなきゃと。定員割れしちゃうぞ、みたいな危機感の中で学校を作ってきた。

でもやっぱり一番の魅力は、生徒も先生も自分のしたいことが自由にできるところかな。そこを大事にしてきたかも知れない。同窓会とかで会う卒業生とかは、自分のしたいことや興味のあることを見つけて、今はそれに向かって頑張っているよ。そういう意味では面白い学校だと思うね。ここはやりたいことが見つければどんどんやれるし、忙しいけども、それはやらなきゃ損だと思う。自由でいいと思います。やりたければ続けばいいし、違うものを見つけたっていうんだったらそっちに行ってもいいと思うね。必ず入学して卒業するまで一つのことをしなきゃいけないとは思わない。世の中どんどん変わっているからね。

*

いろんなことに挑戦させたい

あすなろ祭はすごいぞ！

コロナで一時厳しかったけどもね、去年、一昨年ぐらいからぐっと復活してきて。お客さんがね、一万人超えるからね。それだけ期待されているわけ。ですから、それは楽しみにしてほしいし、取り組むこと自体が一つ大きな勉強になると思うてる。

ところで、中学校を立ち上げた時に一番考えてたのは、とにかく中学生にいろんな体験をさせてあげたいということ。いろんなことを提供し

たい。興味があるなしにかかわらずいろいろやることで、「あ、こんなこと面白いな、こんなことやってみたいな」っていうものが見えてくるといいので、とにかくわけわからなくてもいいから体験いっぱいさせていって、そういう学校作りたかったんで、立ち上げた時からもうみんな海外にも行くし。最初、中学は二年生、三年生がいなかったから、この校舎の中に一年生が五クラスあっただけで、先輩というのはどういうものかも知らない中学生ばかりだったんだけどね。この人たちを一人前に育てて、この人たちが中学三年生になった時に、学校が完成してなきゃいけないなど。そのためには、一年生ですでに「学校」であるっていうね、ことを意識して、中学校を作りました。

*

中学の今の形は最初から目指していた

―あすなろ祭や体育祭は最初からあったんですか。

うん。第一期生の中学一年生の体育祭も、最初からブロック分けをして、リーダー作って、一学年しかないけど、五つのブロック作って、色も決めて、演技も本当に競技としてやって、どこが勝つかみたいな、優勝するかっていうのを、最初から体育「祭」の形式でやったね。

で、また文化祭も、同じように一年生から高校三年生の演劇を彼らは見ることができて、劇団四季にも連れてったし、だから、高校卒業する時は、ああいうプロみたいな劇ができるようになるんだよっていうのを教えて。文化祭も文化「祭」としてやった。

そして、もうとにかく何でもやろうっていうことで、合唱コンクールもずっと今も続いているけど、一年生しかないじゃない。中学校の時、合唱コンやると、優勝したり、なんか金賞取ったりとかすると、もうみんな泣きじゃくりながら抱き合ったりしてるとはじゃない。そういう姿を

知らないわけね。で、どうするかって話になって、でも、合唱コンクール、学校としてやろうぜって話で、市民ホールも使って。でも一学年で大ホール使うって、ちよつと寂しいよねって。千何人も入るところにね、二百人切ってるわけだから、どうしようかなって考えた結果、そうだ、高校一期生(当時二年生)の生徒がいるじゃないって話になって、高校一期生の学年主任のところに言って、お願いをしました。一緒に合唱コンクールやってくれ。高校生が合唱コンクールでグランプリとかとって、あの雄叫びを上げる姿、中一の子に見せてあげてほしいんですということ、やりましようって話になった。ただ、高校生忙しいから、やるけれども、放課後しか練習ができないので、自主的な練習だけですすよと。

だけど、当時の高校生はまだうちの中学から上がった子はいないわけで、みんなあっちこちの中学校で合唱コンクールを経験してきて、同じような感動を味わってきている人たちが高校に来て。それを、それぞれ覚えてるので、燃えるわけだ(笑)。みんながみんな、各中学校でリーダーやってきた人ばかりだから、燃えるわけ。で、その燃える姿をコラボして見せることで、中学校一年生の合唱コンクールを、ホールでちゃんとできるよねってなったの。審査員席って手元ランプとかつけて、で、もう、みんなきよんとしたよね(笑)。

で、本番ほんとに、高校生がグランプリを取った時に、もうみんな泣きながらトロフィー持って抱き合ってた、その姿を見たわけね。これはしめしめ、ということ、次の年からそれが当たり前になったかな。

うん。彼ら中学一期生の子たちは、最初から君たちがリーダー、体育祭も合唱コンもリーダーは一年生からですとなった。君たちが引っ張っていくってことで……、上がないから好き放題やってたけどね、

みんなね。それでも中二になるときは、先輩ってなんやねんという感じだったから、これも高校一期生に来てもらって、先輩講座なんてこともやったね。おかげで、三年生になる頃にはやたらとたくましいリーダーに育った。

だってそれをゼロから作ってたんだ。どうしようっていうところから、明日どうしようだもん。最初から三年間の形があったわけじゃないわけだから、全部一年生の人たちを通じて三年後見通して、三年後の姿はこれ。そこに持っていくためには明日何をするか。明日これをするために今日は何する。だから帰れないわけ。

—その中で失敗することはなかったんですか。
失敗はいっぱいあったと思うんだけど、あんまり覚えてない。

もう作るのが精一杯で、失敗だったのか成功だったのかわからないものもあるんだけどね。少なくとも行事は、例えば中学校の行事だったら、僕自身が二十六年公立の学校にいて、身につけてきたものを全部はき出したから。自分が作りたい学校を作りたい、それが結構自由に言わせてもらえる学校だったんでね。校長先生も最初の頃は何でもやってみなさいって、お任せなんで、やって出せる分だけお金も出すからというふうにやってきたので、先生方も個性を思いっきり出せた。生徒も基本的に満足してくれたかなと思うね。恵まれた学校なんです。

高校の方は守女時代の形、学校のルールというのもあって、就職をする子たちが多い学校だったから、就職をするときに、うちの生徒やったら雇ってもいいなって思ってもらえるような学校作りを先生たちがしてたわけなのよ。だから、かなり厳しい校則だったと思う。今、校則改正っていうのやってるじゃないですか、先輩たちがね。それは、今の立命館守山の学校らしさをどう作るのかっていうことで一生懸命考えてやつ

てくれてるんだけど、要するに、守女は就職を胸張って斡旋できる、そういう学校を作ってほったんよね。

その厳しさのいい面は残しよう。規律があつて、いい加減ならだらした生活をして、そういう学校を作りたいねっていうのがあつたので、高校はもとと形があつたものを作り直しながら進んでいく。

でも、中学校はゼロからだったから、じゃあ何するって話でね、経験のある先生たちはたくさん集まつてくれるけども、私立の附属や、他の私立だとかを経験した人が中心だったので。守女からそのまま立命館の先生にならない先生とかも。そうすると、公立の中学校で何やつてるかを知らない人ばかりで、そういう中に学年主任で私が入ったので、じゃあ好きなようにやらせてねって、しんどいかもしれないけどついてきてっ、っていうことで、もう最初からこの辺にはない中学校を作りましようっていう感じにもなったのよ。

で、最初から、ちゃんと生徒会も作って、委員会を作ったり、それから、各クラスには六つの班を作って、班長さんを立ててクラスづくりをしていきましようという基本的なルールを決めて、どんどん今の立守に近づいていったんだ。

田んぼでの泥んこドッジボールに始まる田植え・稲刈り・餅つき体験、年間十回も琵琶湖博物館に通った琵琶湖学習、体育祭、文化祭での「田楽踊り」、八日市の二疊大風づくり、広島・大久野島での平和研修、琵琶湖畔での英語合宿、ニュージージランド研修などなど、最初の三年間で全部やりました。学習でも、脳の活性化と称して、毎朝、朝の読書マラソン、五色百人一首、百マス計算、文学作品のなぞり書き、自主学習ノート……、これでもかというくらい基礎学力づくりも頑張った。

*

高校一期生を担任した懐かしい思い出

―担任をした生徒たちのことは結構鮮明に覚えているんですか。

高校一期生持つてましたよ。一期生の一年一組の担任。あんまりたくさん資料持つてくると、話が止まらないんで、(写真を見せてくれた)

これが一期生、一年一組の人たちで三十八人。このクラス、公立中学での生徒会役員経験者が九人もいたりして、毎日が学園ドラマ。一組の人たちは、入学してたった二週間(最初の学年合宿)で、クラス全員で「ロックソラン」を踊ってみせた。先生は放任主義! っっていわれたけど、担任がすることないんだよ。

制服が今と違うでしょ。この制服は守山女子高校のカラーをそのままで、女子はみんなちよつと肩がいかつく見えるけれども、スーツ。女性のスーツだから、ここに肩パットが入ってたのね(笑)。ビシッと着こなすとすごくかっこいいんだけど。で、それが最初に残ってました。今はどうかな。伝統として引き継がれてるみたいなものは残ってると思う。「あすなる祭」のネーミングなんかもそう。

うん、この人たち(二期生の高校一年生)はね、元の守女校舎だったんで、なかなかワイルドだったよ(笑)。最初の一年間は、地震が来たら崩れちゃうかもしれないっていう、雨が降るとね、雨漏りがするんで、そういう校舎で。で、私のクラスはね、一年一組は一階だったのね。教室のドアを開けると、廊下はあるんだけど、その廊下の向こうは壁もないグラウンド。中庭のようなグラウンドがあつて。で、休み時間になると、みんなそのまま出て行って遊んで戻ってくるから、教室の中はもう土まみれ(笑)。毎日、掃除の時はもう砂埃でかすんでしまうぐらい。で、それを、掃除する。結構真面目にね、男女仲良くやってました。掃除もみんなサボらない(笑)。

学年全体見たら、最初の一期生から、確かにいろんな個性の子がいま
した。今よりもちよつと個性の幅は狭かったかな。二百四十人しかいな
いので、六クラス、四十掛ける六で。

この子たちを担任として受け持つて、一年間だけ担任をしてから中学
を立ち上げたんだけど。前任校で、中三を卒業させてすぐだったか
ら、中卒生をそのまま次の年に自分が担任することになったという感覚
だったので、違和感はなかった。中学生から高校生になったからといっ
てね、そんなに変わらないっていうことが分かりましたよ。高校生の担
任を経験していなければ、高校生のことがわからないままに中学を立ち
上げることになったので。だから、この一年はすごく貴重な一年間だっ
たかな。生徒もみんな素敵でした。吹奏楽部を作った人たちは、打楽器
代わりに一年間ずっと机をたたき続けていた。アメフト部は近所の窓ガ
ラスを割らないように用心し、男子バスケットは練習場所を転々とする
日々。不足の中でも、みんな真剣で夢があった。

守山の高校一年生を一年間経験して、この人たちがどんなものを目指
していつてほしいのかとかいろいろ考えながら、どんなことをやって大
学に行つてほしいのかっていうことを考えていたので、中学校を作ると
きの参考にはすこくなりましたね。中学に入学してきた子たちが六年間
ここにいて、最後にどうなるのかっていう見通しがある程度見えて、中
学校を作ったので。

ものすごく印象深い。ほんとに最初の子たちだからね。
今日は貴重なお時間を頂き、ありがとうございました。

【感想】

わたしは井上さんのお話を聞いて、自分が何にも挑戦できていないこ
とに気づくことができた。自分のしたいことがなかなか見つからないこ
とよく言っていたが、自分から行動してこそ選択肢が広がるんだと思つ
た。井上さんの中学を立ち上げたという経験もとても大きな挑戦だった
けど、自分の描く学校を作るために自分の持っているものを全て出して
挑戦できていた井上さんの話を聞くと、もっと自信をもっているいろんなこ
とに関わっていこうという前向きな気持ちになった。



左：語り手 井上眞二さん

右：聞き手 山登茉桜